

No.446

企画展「大自然 立山連峰 ヤッホー 3000mの世界へ」展示解説

高山の山肌がまだらもようになる理由



写真1 夏 7月下旬の雷鳥沢の山肌。

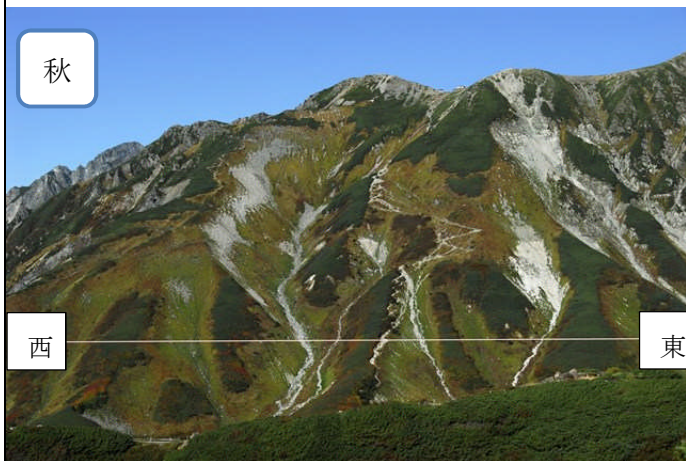


写真2 秋 9月下旬 上の写真と同じ場所。

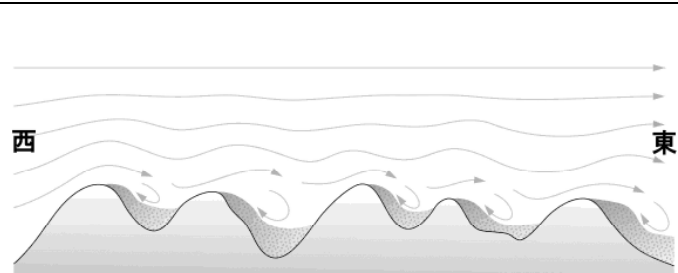


図. 冬の強い西風が雪の積もり方を左右する様子。

→ : 冬の季節風 ○ : 積雪

高山の軽い雪は、風が吹き抜ける斜面（図では山の左側）では積もらず、風が回り込む山の陰（同右側）に多く積もります。

写真1は、立山のミクリガ池から見える雷鳥沢の山肌です。全体が白と黒のまだらになっており、真っ白の部分は8月になるまで消えない残雪、黒い部分は背の低い松（ハイマツ）が生えている場所です。中央には標高2750mの剣御前小屋へと続くジグザグの登山道も見えます。

さて、同じ山肌なのに、どうして雪のある場所とない場所ができるのだと思いますか。

これを解くかぎは、冬によく吹く強い西風（季節風）にあります。下の図は、冬の季節風が雪の積もり方を決めている様子を示したものです。地形の凹凸は、写真2の白線に沿った部分の断面を表しています。

雪を伴った強い西風は、山の西側では雪を落とすことなく吹き抜け、山のかげ（東側）に回り込んだところで大量の雪を落とします。

雪どけは夏にむけて全体的に進むので、雪の積もらなかった場所には春が早く訪れ、雪の多く積もった場所では雪どけに時間がかかり、春が遅くなります。このことが毎年同じように繰り返されるので、山の西側にはいつも雪が少なく東側にはいつも多い状態となり、それぞれの環境を好む植物が定着します。写真1からは、尾根の左側が黒、右側が白になっている様子を読み取れます。

地形の凹凸に冬の季節風と雪が組み合わせられた結果、高山の山肌には、いつも同じ形のまだらもようが作り出されます。（太田道人）